

# ふぶ

2024 Eye's  
新潟ここだけ物語

想い | つくる | 伝える

佐渡市



[Fuud]

2024  
冬号  
— 季刊 —

# 俺たちの鬼太鼓

Take Free

ご自由にお持ちください

一年に一度の祭りの日。前日の大雨で洗われた海岸段丘に広がる集落を、大太鼓を先頭にした太鼓組の一行が、太鼓を打ち鳴らしながら一軒一軒めぐり、各家の庭先で太鼓のリズムに合わせた芸を演じる。佐渡島には、こうした鬼太鼓の門付けを行う地区が120近くある。(11月3日 佐渡市羽茂小泊)

がんばろう ● ニッポン!



今回の取材テーマ  
佐渡の建物

取材メモ 12



羽茂小泊の取材の際に、岡崎一也さんが集落周辺を案内してくれた。その時、見慣れない屋根を持つ民家を目撃。入母屋造りの大きな屋根は、赤瓦のように見えるが、褐色やグレーの部分もあり、色彩がまだらになっている。「これはいったい何だ」と近づいてみると、表面は金属のようだ。しかしどう見ても形状は瓦、不思議に思っ眺めていると、家の主人が出てきて「ウチのオヤジの頃、かやぶき屋根の上からトタンを貼ってもらったんだ」と説明してくれた。かやぶき屋根の上からトタンで覆う工法はどこにもあるが、このように瓦そっくりに仕上げた屋根は初めて見た。主人の話では、職人は島外から頼んだそうで、同様の屋根は島内にもう1軒あるらしい。一般的なトタン葺きに比べれば、大変なコストと高度な技術が必要なのは想像できる。

ほかにも、佐渡には興味深い建物が各地に存在する。相川には、大間港の赤れんが造りの倉庫や旧税務署などが、明治から昭和にかけての激動の時



代を語ってくれる。佐渡の場合、このような文化的なものだけでなく、ごく普通の民家にも意匠を凝らした建物や造作が残っていることに驚く。散歩しながらそれらに出会い、いつ建てられ、どんな人が住み、どんな暮らしが営まれていたのか、カメラを向けつつタイムトラベルしてみるのも楽しいものだ。

以前、住人がスキの刈り取り作業をしている場面に出合った。かやぶき屋根の材料用だそうで、全て島内で消費されると話していた。

島の歴史の中で、様々な建築様式が持ち込まれ、それがしっかり残っている。佐渡は島全体が、巨大な建築博物館となっている。

写真、文章 / スタジオF(t) 渡部 佳則

- ①羽茂小泊の民家の屋根。鬼瓦なども金属製で、遠くからトタン葺きには見えない。
- ②旧相川税務署本館。昭和6年に建てられたそうで、国登録の有形文化財に指定されている。
- ③かやぶき屋根の材料となるスキの刈り取り作業。

## 編集後記

今号の取材は、ほんとうに楽しかった。これほど全島で鬼太鼓が深く根づき、集落の結束力に欠かせない神事だったことを知らなかった。そして旅の者を快く受け入れ、祭りの当事者と同じように門付けのご馳走を振る舞ってくれることにも驚いた。馬首では「こんな小さな地区の鬼太鼓を、よく見に来てくれた」と喜ばれ、羽茂小泊では「女性が見てくれて張り合いになった」と言ってくれた。それは社交辞令ではなく、陸地を隔てる島ならではの受容性を物語っていたように思えた。よくよく考えれば島の外周を巡る海辺の集落は、すべて湊であり、いつの時代も新しい人や文化の玄関口でもあった。佐渡は「流人の島」という暗いイメージの島ではない。それは歴史のほんの一断面に過ぎず、本来の佐渡は古代から海という広大なネットワークを背景に、異文化を貪欲に吸収し自らを変革してきた柔軟性と先見性に富む逞しい島であると、今は強く思う。(渋谷)

ふうど 2024冬号 vol.13

企画編集 ふうど編集室  
発行人 高橋 佑  
取材編集 波川綾子  
写真 渡部佳則  
デザイン 斎藤道司  
題字 小林 翠

## 発行所

株式会社 **タカヨシ** **ふうど** 編集室

SUSTAINABLE GOALS 私たちは新潟の食・文化・風土の伝承を通じて持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

■本社・工場 / 〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800  
■東京支社 / 〒113-0034 東京都文京区湯島3丁目24-11 湯島北東ビル2階 TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884  
■上越営業所 / 〒943-0805 新潟県上越市木田2丁目1番1号 上越セントラルビル5階2 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 520-7049  
■仙台営業所 / 〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5丁目3-47 上杉オオクワビル501号室 TEL (022) 266-1711 FAX (022) 266-1712  
■名古屋営業所 / 〒464-0025 愛知県名古屋千種区桜が丘295番地 第8オオタビル7階 TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081  
■オフィシャルサイト / <https://www.takayoshi.co.jp>

「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】<中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、NST、上古城商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店みたと工務、朱鷺メッセ、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟県立図書館、新潟国際情報大学、新潟中央キャンパス、新潟市市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・子育てセンター、新潟市立中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニオンプラザ、ピアBandal、ホテルイタリア軒、ホテル日航新潟、リバーとびあ新潟市民芸術文化会館 <東区>新潟空港、桑名病院、パティスリーカフェオルレアン <西区>新潟ふるさと村、新潟大学附属図書館、佐渡荘 <南区>新潟市農業活性化研究センター <北区>新潟せんべい王国、ビュー福島潟、濁川公民館<江南区>介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田図書館、北方文化博物館 <西蒲区>カーブドッチ、ドメス・シヨオ <秋葉区>カフェギャラリーやまぼうし、川内自動車、新津鉄道資料館  
【新潟市】加治川地区公民館、紫雲寺地区公民館、新発田市生涯学習センター、新発田市民文化会館、新発田立図書館、豊浦地区公民館 【聖籠町】聖籠観音の湯 ざぶーん 【村上市】イヨボヤ会館、村上市観光協会  
【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡大学、長岡市立中央図書館、やまこし復興交流館おらたる 【燕 市】分水ビジターサービスセンター  
【出雲崎町】越後出雲崎天領の里 【十日町市】十日町市観光協会、十日町市博物館 【南魚沼市】樽苑  
【上越市】上越観光コンベンション協会、上越市水族博物館うみがたり、上越市立高田図書館、上越市役所、上越あるん村  
【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡、佐渡市立図書館  
【東京都】<中央区>ブリッジにいがた <千代田区>新潟市東京事務所  
本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。



針金・糊・加熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。



この印刷物は環境にやさしい米ぬか油を使用したライスインクで印刷しています。

# いい鬼が やつてくる



太鼓のリズムに合わせ、鬼が激しく舞う佐渡島の鬼太鼓。佐渡を代表する芸能だが、本来は祭礼にもなう門付け神事で、全島の半数以上の地区に、『俺たち自慢の鬼太鼓』が根づいている。なぜ、こうまで佐渡に鬼太鼓が広く浸透しているのか。知っているつもりもりの鬼太鼓を探る旅へ、海峡を渡ってみよう。

## 想い 憧れのヒーロー

### 内海府の馬首にて

佐渡の鬼は、いい鬼だ。村人に助けてもらったお札に、こっそり田植えしてくれる優しい鬼なのだ。そんな鬼の伝説が語りつがれ、〈鬼〉の字がつく地名が島内にも偏在する内海府エリアに、馬首という戸数四十軒ほどの海村がある。



10月28日、氣比神社の秋祭りで行われた、鬼太鼓の門付け神事の様子。

その地区に祀られている氣比神社の秋祭りの日に鬼太鼓があるとネットで知り、五年ぶりに佐渡海峡を渡る。十月二十八日の朝、両津港の背後を塞ぐ金北山を主峰とする大佐渡山地は、所々をうっすらと晩秋に染め、旅人を迎えた。埠頭の町から海岸線の道を北へ走り、二十分ほどで馬首の標識を発見。しかし集落はひっそり。周辺地区に詳しい人でさえ、馬首に鬼太鼓があるのかと訝しそだったことを思い出し、不安が募る。するとドンドンコンドンッ！と太鼓の音が、どこからともなく聴こえてきた。やってる！やってる！と興奮しながら、音のする方向に急いで行くと、ある家の庭で、色鮮

やかな衣裳をまとった鬼が、長い髪を振り、楯を細かく揺らし激しく舞っていた。その周りを多くの人が囲み、「さあ〜来い！〜そら打てそら打て！さあっ！」と声を揃え鬼の舞いを鼓舞している。狭い空間に充滿する太鼓と、男たちの力強い声が混ざり合い、日常的な空間はエネルギーが渦巻く祭りの場に変貌していた。だが鬼太鼓の真髄は、その先にあった。全身全霊で太鼓を打ち鳴らして舞う鬼が、ふいに向きを変え、母屋の奥を睨み、わらじ履きのまま座敷に飛び込む。神力を増した鬼が家内に籠る厄を祓い、一家の安泰をもたらす所作をするのだという。神棚のある座敷で習いどおりに舞い、庭に戻った鬼は、前よりさらに激しく何度も飛び跳ね、一連の所作を舞い終えた。続けて別の鬼が同じような所作を舞った後、この家での太鼓と鬼の競演がようやく終わる。そして鬼は面を外し集落の一人の若衆に戻り、家人が用意してくれた沢山の馳走を囲んで、日頃交流の少ない集落の人と歓談のひとときを楽しんでいた。このふるまいの料理は来訪した神に捧げた神饌で、そのお下がりを戴くことで神の力を授かる共食の意味もあった。こうした鬼太鼓の舞と神と共食するまでの一連の行事が、鬼太鼓の真髄である門付け

神事だった。恥ずかしながら、鬼のパフォーマンスに、こんな深い意味があるとは、この時まで知らなかった。

## 誇らしい

馬首の鬼太鼓は、地元の青年団からなる鬼太鼓組によって行われる。朝、氣比神社で神威を授かる儀式を終えた一行は、夕方までにほぼ全ての家の門付けを終えるそう。

馬首の鬼太鼓の特徴について一昨年まで団長だった岩原慶郎さんは、「オスとメスの鬼がいることと、高く跳ねあがるのが特徴で、その高さは島内随一です」と誇らしげに語る。確かに名人級の鬼は、地面から数十センチも高く跳び跳ね、圧巻だった。毎年見ているはずの地元の人でも驚きの表情で、そのアクロバティックな動きを凝視していた。でも内心ではみんな自分が一番格好いいと思ってる、と後で地元の人から聞く。それほど一人ひとりがプライドを持って鬼太鼓を演じている。その誇りは、どこから生まれるのか。

「鬼太鼓は馬首で生まれた男の子だけが舞うことができる、村外不出の伝統芸能です。ここから北



祭りの定番〈煮しめ〉のほか門付け先で振る舞われたご馳走

の内海府には、鬼太鼓のある集落は二地区と僅かしかなく、鬼太鼓のない集落から羨ましがられることが多いのです。そんな声を耳にする度に、鬼太鼓がある馬首に生まれたことを誇らしく思います」と岩原さんは言う。きつと集落の全員も同じ思いだろう。鬼太鼓の所作や流儀は、青年団の先輩から後輩に伝えられる。どのように教わるのか。太鼓の打ち手の一人、岩間大輔さんは「最初に鬼の舞いを教わり、一人前になったらから太鼓の打ち方を教わります。なぜなら鬼の気持ちから分らないと、いい太鼓を打てないからです。でも先輩の教え方はかなり大雑把で、何が何でも鬼太鼓の昔からの所作を伝承しようというのではありません。馬首の場合、時代とともに流儀が変わっていくことを受け入れる、大らかな鬼太鼓です。年に一回、集落のみんながハッピーになることが大事だと思えます」と教えてくれた。

何軒かの門付けについて回るうちに、一行の行く先々で見学の子どもたちが増え、大輔さんに技を伝授した先輩も「血が騒ぐ」といい、飛び入りでベテランの妙技を披露した。こうして時折の雨にもかかわらず、祭りはいよいよ鬼とともに次第にヒートアップしていった。



2次元コードから動画をご覧になれます。

# 待ってる 人がいるから



つくる 始まりは住民愛

## 新しい太鼓組

馬首の感動を引きずったまま、もうひとつの鬼太鼓を観た。  
南佐渡の海岸段丘で、ひととき大きな村域を持つ羽茂小泊で、地元『鼓泊組』を中心に総勢二十名の男衆が演じる、どちらかと言えば現代風のリズムミカルな小泊祭り太鼓である。

羽茂小泊は奈良平安の頃、傾斜のある地形と豊かな森林資源を活かし瓦や食器が大量に焼かれ、遺跡調査から百基近い登窯があったと推定されている。それから千二百年の時を経て、昨秋の十一月三日、かつて密林の中から立ち昇る白煙がたなびいていた空に、終日、賑やかな太鼓の音が吸い込まれていった。

その第一打は、朝の六時過ぎ、海抜八十メートル地点にある白山神社の境内から放たれた。これも太鼓に神を遷す儀式がある。厳肅な神事後、太鼓は道行きの華やかなリズムに変わり、凛々しく祭り衣裳に身を包んだ一行は、参道を抜け、最初に門付けする家に向かう。一ヶ月前から毎晩のように稽古を積んできた男たちの表情は自信に満ち、これから始まる百軒におよぶ門付けへの心意気を秘めていた。全員が太鼓

を打ち、舞いもこなす、芸能の巧者なのだ。

## せめぎあう太鼓と鬼

ドンドコ・ドンドン！数年前に皮を張り替えたばかりの太鼓が放つ若やいだ音は、あたりに祭りの高揚感を振りまき、一行の訪れを待ち焦がれる家々に鬼太鼓が近づいていることを告げていた。長い坂を下り、一軒目の門付けの家に着するやいなや、ドット・ドット！ドンドン・ドーンと太鼓が打ち込まれた。すると「そら行け！やれ行け！」と威勢のいい掛け声とともに、二人の素面の鬼が両手に持つ樽（びん）を打ちながら、片足でケンケンするように太鼓の前に進み、向かい合って舞い始めた。それは映し鏡のように、相対した二人が同じ所作で同調しながら続いていく。別の舞い手が樽を打ち交わす音を合図に、太鼓と鬼が次々に交代する。しばらくして太鼓が挑むように早掬（はやかき）になった。それに応え舞い手の動きも激しさを増し、三人の動きが溶けあい完全にひとつになり、鬼太鼓は最高潮に達した。凄（すご）い！鳥肌がたった。もっと観たいと思うや、ホイッスルが鳴り、一瞬にして妖（あやかし）の世界が立ち消え、場の空気が緩む。

そこへ間髪を入れずに沢山の盃を盆にのせた主人が一行に酒を勧

めてまわり、「栄養補給だから」と年配の女性がロールケーキを配り始める。朝から日本酒？甘いもの？と驚く同行者を尻目に、「一行は「せっかくの心遣いだから」と、お酒を飲み干し、美味しそうにケーキを頬張った。凛々しかった男たちは、一気に同じ集落のあんちゃん顔になり、門付けの庭は明るい笑顔に包まれていく。

## 自分たちが楽しむ

男衆による集団パフォーマンスは、鬼の面はつけないが見応えがあった。でも、なぜひとつの集落でそれほど多くの演じ手がいるのか？鼓泊組の発起人の一人、岡崎さんに聞いてみる。

「青年会として祭りをもっと盛り上げたいと考え、明治時代から祭り行事や能楽の呼び太鼓として使われてきた大太鼓が小泊神社にありまして、それを借用し芸能としての門付け太鼓を始めました。三十数年前のことです。太鼓の打ち方は隣接する地区の羽茂中央青年会から教わり現在に至っています。ただ一日で百軒近くの家々を回るのは地元メンバーだけでは難しいので、羽茂中央青年会と元小泊地区の元若連のほか、各集落の有志から応援してもらっています。その代わりに、それぞれの地区の祭りに私たちが

応援に行くのです。村外不出の伝統芸能が多いなか、近隣の集落と助けあって地域を盛り上げようとする姿勢は、柔軟だ。

地元にとっては新しい芸能である門付け太鼓を採り入れ、集落に定着させた原動力は何だろう。「自分たちが演って楽しいから」と端的に答える岡崎さんの傍で、他のメンバーが自分の思いを語り始める。ある人は「小泊は舞踊系で動きが速く、覚えるのに難しい型があります。でも太鼓は叩くたびに魂が入り、演者も神がかりになり、思わぬ力が出る瞬間があり、それが堪らない魅力です」と演じる側の高揚感を語る。もう一人は「集落のみんなが喜んでくれるのが嬉しい。なかでも神社まで行けない年配の人は、家に居ながら祭りを楽しめるのですから、その喜びようは格別だと思えます。ある年、門付けに行った先のおばあさんが「ありがとね」と言い、通常のお花代とは別に、ティッシュで包んだお金を手渡されたことがあります。そんなふう感謝され、こちら嬉しくなり涙が出そうになりました。それ以来、年配の方の帰り際には、「来年も元気でお待ちっちゃん！」と声をかけるようにしています」と門付けの意義を語ってくれた。最後に「こうして待ってる人がいる限り、この先も鬼太鼓が続けます」と岡崎さんが、きっぱり言った。



11月3日、澄み切った空のもと、20人の素面の男たちが太鼓の音を響かせていた。



2次元コードから動画をご覧いただけます。

お祭りに集まってきた馬首地区のみなさん(上)と門付けの前に顔を揃える羽茂小泊の鬼太鼓の一行(下)。



では、高度成長期、都会に出た男性に代わり女性陣が活躍し、また両津の春日は、地元のこともや女性の他、海外の人の参加もあるようだ。日本の多くの地域

から伝統芸能が次々に消えていく現代にあって、佐渡の人の鬼太鼓に対する眼差しは、未来に向けられていた。さまざま観点から鬼太鼓の魅



鬼に扮した父親と同じ衣裳を着た幼児が棒を持つ。

## 伝える 鬼太鼓の普遍性

### 必然の鬼太鼓

海沿いの馬首と、段丘の羽茂小泊。ふたつの鬼太鼓はそれぞれの魅力を放ち、瞬時に観るものも心を解す力があった。しかし、それは大きな島の一点に過ぎず、実は鬼太鼓は島内で百二十の地区に存在するといふ。

なぜ、一つの芸能がこれほど広く浸透しているのか。全島の鬼太鼓に詳しい松田祐樹さんは「地元の祭りを盛り上げるための門付け神事として、多くは各地の青年団が中心になって開催している。そして鬼の舞い姿が非常に格好いいことから、羨ましいと思った地区から地区へ伝播していった。また祭りの一ヶ月ほど前からみんんで練習し、さらに門

### 即興性の妙味

そもそも鬼太鼓の『格好よさ』とは何か。何が人を感動させるのか。音の文化と教育との関連をテーマに国内外の民俗音楽を研究する新潟大学名誉教授、伊野義博さんに話を伺う。伊野さんは、毎年のよ

付け先の小宴会などで濃密な人間関係が生まれ、地区の結束力を高めることに繋がる。鬼太鼓は祭りに賑やかさを添える単なる芸能ではなく、地区のコミュニティづくりにかかせない重要な行事だ」といふ。また鬼太鼓の盛衰について、あくまでも私見だと前置きし「高度成長期に働き手の多くが島を出て、担い手が激減し中止を余儀なくされた地区があった。でも離島振興法に基づく政策が浸透してくると島内に雇用の場が増え、人が戻ってくるようになった。そんな時、(祭りに何にもない)寂しいね」といふ思いから鬼太鼓が各地で復活したのでは」と説明する。松田さんは多忙な社長業の傍ら、NPO法人佐渡芸能伝承機構の代表を務め、国内でも希少な佐渡の伝統芸能の普及活動に取り組んでいる。

うにゼミの学生を連れ、多くの地区の鬼太鼓を観た経験に基づく知見を講演や執筆を通して広く伝えてきた。

新潟大学の広大なキャンパスの一隅にある研究室は、明るい日差しが差し込み、壁に飾られたブータンとネパールの伝統楽器が大陸の風を運んでいる。

### 多彩な表現

地区により鬼太鼓の独自性があるが、それはなぜだろう。

「鬼太鼓は、とにかく楽しい。他の芸能と比較して、断然元気がいいです。鬼太鼓は太鼓と鬼が一緒になって成立する芸能で、即興的な要素をとまなう、複雑な繋がりの方が面白いです。」「太鼓の叩き方には、一定のリズムを繰り返す刻む地桴と、スピード感のある複雑な叩き方をする早桴があります。その太鼓が発する波動で心が動かされた鬼は、自然と舞い始めます。太鼓は鬼の気持ちを感じ、時に即興も交えて叩き方を変え、ほとんど鬼を昂ぶらせていきます。それを間近で観る側にも、太鼓の振動が伝わり心が揺さぶられていくのです」と巧みなオノマトペを交え伊野さんが解説する。それまで感覚だけで観ていた鬼太鼓が、奥行きのある芸として少し理解できた。

「佐渡ではふと出会った人が能のシテを演じていたり、こともたしが大人顔負けのリズム感で鬼太鼓を演じるなど、島民の芸能に対する熱が高く、新しい芸能を貪欲に吸収し自分のモノにする能力に長けているように映ります。そうした演者の気質に加え、集落が比較的近距离に隣り合うことから、隣の集落と違う『うちの鬼太鼓』を志向する風土があります。それが、いい意味で競争心を生み、各地区の独自性に繋がったと思います。」「毎年、四月十四、十五日の佐渡の島びらきの日には、約四十の地区で鬼太鼓が演じられるという。それが『もの凄く、いいんです』と伊野さんは嬉しそうに言う。

一方、伝承性という点でも、自発的なエネルギーがあるという。例えば、相川の南片辺という地区

力を語ってくれた伊野さんは、最後に「地域の伝統芸能は、その土地の風土や歴史、文化の原点です」と伝統芸能の重要性を説いた。

者の宮本常一を通じ著名な放送作家や俳優に伝えられ、彼らの活動により、その名が全国に知られていったのです。鼓童誕生の背景に、稀人を尊ぶ島の精神性が見えてくる。

と、ところで佐渡の太鼓といえば、佐渡を拠点に国際的に活躍する和太鼓芸能集団『鼓童』である。だが、鼓童は佐渡の鬼太鼓から直接的な影響を受けてはいないという。

その経緯を長い間、佐渡市議を務め、佐渡の振興を見つめてきた祝優雄さんに教わる。鼓童の前身である『佐渡の國鬼太鼓座』は、島外から来た田耕が、日本古来の和太鼓で地域振興を図ろうと、全国から若者を募り発足させたプロの芸能集団です。その地縁のない若者たちを地元の人が温かく受け入れ、もともと鬼太鼓が盛んだった土地柄もあり佐渡に定着しました。やがてその取り組みは民俗学

祝さんにとって佐渡の一番の魅力を探ると、即座に「豊かさです」と答えた。「佐渡は大自然のなかに現代の普通の暮らしがあります。本土では山奥の溪流にしかない鮎やヤマメが、近くの川に泳ぎ、家の周りで山菜やきのこが採れます。これほど居ながらにして自然の恵みがある、豊かな土地は世界でも珍しい」と明言した。

確かに佐渡は、気候も温暖で暮らしやすい島だ。その豊かさがもたらすゆとりと、天領として過ごした三百年ほどの間に培われた文化度の高さが、島を舞台にさまざまな人々を芸能に向かわせたのだろうか。いずれにしても鬼太鼓も世界に誇れる島の宝物だった。

### 読者の声 ～前号を読んで～

#### ワクワクしました

みかづきのイタリアンは子供の頃から慣れ親しんだ味で、時々無性に食べたくなります。その歴史と古町の今昔を重ねて読むことができ大変面白かったです。表紙の芸妓さんたちの写真、昔の古町の様子も素敵でした。古町全体をホテルにするという構想があるとのこと、古い町並みなど再現したら面白そうですね、ワクワクしました。

(新潟市 50代女性)

#### 長岡のイタリアン

いつも当誌で新潟を深く知ることができ嬉しいです。長岡には『お嬢さん、変わった焼きそば始めました』のような洒落たキャッチフレーズはありませんが、息子達は帰省のたびにお嬢さん、孫と一緒にフレンドイタリアンを食べています。その時はフレンドギョウザも一緒です。

(長岡市 80代女性)

#### 遺伝子の違い?

イタリアンから始まる新潟古町の歴史物語、大変興味深く読ませていただきました。我が家では全員イタリアンが大好き。息子は帰省する度に食べますが、県外出身のお嬢さんには不評のようで、食の好みは遺伝子によるのかなと思っています。

(新潟市 70代女性)



日本やブータンの民俗音楽研究を続ける伊野義博さん。